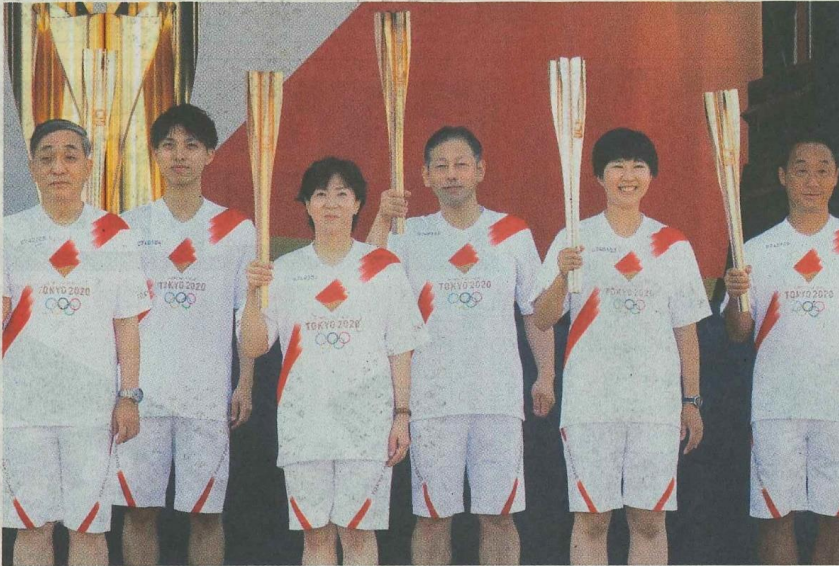


# コロナ禍での五輪パラ閉幕 健康意識向上の契機に

聖火ランナーを務めた村下教授(右から3人目) 弘前大学COI提供



東京を舞台に繰り広げられた五輪、パラリンピックが5日閉幕した。1年の延期を強いられるなど新型コロナウイルスとの闘いの中で開催された今大会に、東京五輪の聖火ランナーを務めた弘前大学COI研究推進機構の村下公一教授(53)は「コロナ禍で健康に対する関心が高まっている中で開催だった。五輪やパラリンピックが健康意識を高めるきっかけになれば」と期待する。

(成田真由美)

## 聖火ランナーの弘大COI 村下教授

日本一の「短命県」という汚名の返上を掲げ、本県の健康増進に力を注ぐ弘大COI(中路重之拠点長)。中でも基盤となる「岩木健康増進プロジェクト」は医療関係者だけでなく、住民も一体となったプロジェクトで、人工知能(AI)や蓄積したビッグデータなど最先端技術を駆使して病気の発症を予測したり、住民に対する健康指導を行ったりして、病気の予防に目を向けた「寿命革命」を目指してきた。

こうした取り組みは世界的にも注目され、今年には国連のアジア太平洋経済社会委員会(ESCAP)の報告書で、弘大COIが岩木健康増進プロジェクトなどで集めたビッグデータの活用事例が紹介され、初めて国際的な評価を受け

た。

若手研究者で聖火ランナーを務めた村下教授は、東京五輪・パラリンピック組織委員会の「ピックアップ聖火ランナー」で、「寿命革命に情熱を燃やす大学教授」と紹介された。

村下教授は聖火ランナーの経験を「多くの人がつないだ聖火を引き継ぐことができたことは大変意義があること。新型コロナの状況を見極めながら努力された関係者の方々に感謝

し、アスリートの活躍をたたえたい」と振り返った。

その上で、予防医学に注目した弘大COIの取り組みについて「新型コロナが世界中でまん延している中、世界に貢献できる取り組みと考える。短命県返上を成し遂げるだけでなく、世界の健康づくり、SDGs(持続可能な開発目標)の達成に貢献できるように発展させていきたいと思いを強くした」と力を込めた。